

2020年6月20日(土) 19:00 開演

2台
ピアノ

チャイコフスキー：組曲「くるみ割り人形」Op.71a

Tchaikovski : The nutcracker suite Op.71a

1. 小序曲 / Miniature overture
2. 行進曲 / March
3. 金平糖の精の踊り / Dance of the candy fairy
4. トレパーク / Trepak
5. アラビアの踊り / Arab dance
6. 中国の踊り / Chinese dance
7. 葦笛の踊り / Dance of the reed-flutes
8. 花のワルツ / Waltz of the flowers

第1ピアノ：角野隼斗 / 第2ピアノ：亀井聖矢
Primo: Hayato Sumino / Secondo: Masaya Kamei

亀井
聖矢

バッハ：半音階的幻想曲とフーガ ニ短調 BWV903

J.S.Bach : Chromatische Fantasie und Fuge d-moll BWV903

角野
隼斗

ショパン：スケルツォ第1番 口短調 作品20

Chopin : Scherzo No.1 h-moll Op.20

亀井
聖矢

リスト：パガニーニ大練習曲第3番 嬰ト短調 S.141-3 「ラ・カンパネラ」

Liszt : Grandes Etudes de Paganini No.3 gis-moll S.141-3 「La campanella」

角野
隼斗

サンサーンス=リスト：死の舞踏 S.555

Saint-Saens=Liszt : Danse macabre S.555

2台
ピアノ

ラフマニノフ：組曲第2番 作品17

Rachmaninov : Suite No.2 Op.17

1. 序奏 / Introduction
2. ワルツ / Valse
3. ロマンズ / Romance
4. タランテラ / Tarantella

第1ピアノ：角野隼斗 / 第2ピアノ：亀井聖矢
Primo: Hayato Sumino / Secondo: Masaya Kamei

▽チャイコフスキー / 組曲「くるみ割り人形」

「眠れる森の美女」「白鳥の湖」と共にチャイコフスキーの三大バレエ作品に数えられ、このうち最後に作曲されたのが本作の元になったバレエ作品「くるみ割り人形」である。当時チャイコフスキーは、自作を演奏するコンサート企画していたが、手元に新作がなかったため、作曲中の「くるみ割り人形」から8曲抜き出して演奏会用組曲とした。

Sumino Memo

19世紀後半まで、バレエ音楽は音楽家にとってそれほど重要なジャンルとはみなされていなかったようです。いわばバレエを踊るための伴奏の音楽（BGM）だったのです。しかしこの頃からチャイコフスキーの3大バレエをはじめとして、ストラヴィンスキーやプロコフィエフなどバレエ音楽の名曲が数多く誕生します。バレエは映画やミュージカルと同じく総合芸術であるため音楽単体として存在するわけではなく、踊りという形態との関わりが必ず存在します。それぞれの曲の踊りはどのようなものなのか、共に思い浮かべながら聴いていただけたらきっと楽しいと思います。

Kamei Memo

かわいらしく軽快な序曲、お菓子の精などをモチーフにした6つの踊り、華やかに最後を飾る花のワルツ。バレエ曲から編曲されたもので、どれも有名な小品ばかりです。原作では管楽器や弦楽器、ハープ等色々な楽器で表情を変えたり装飾が加えられていくところを、今回はピアノのみで表現していく必要があるので、どういう風に変化させていけば二台ピアノである点を最大限に活かせるかというのを、お互いの音色を探りながら考えていきました。

▽バッハ / 半音階的幻想曲とフーガ

自筆譜が現存していないため作曲時期は明確ではないが、1717年から1723年に書かれたものだと推測される。「幻想曲」と「フーガ」と題された2つの部分からなり、ロマン的で即興的な幻想曲は、様々な形で構成された華麗なトッカータ様式で進んでいく。フーガは半音階的な主題に基づく三声のもので、こちらでも転調を繰り返しながら進んでいく。

Kamei Memo

半音階を一貫したモチーフとする作品で、半音階には苦悩や痛みといった意味が込められているとされています。バッハときくと堅苦しいイメージを持つ方も多いかもかもしれませんが、「幻想曲」は情熱的、即興的で、「フーガ」は半音階を用いたテーマが調や表情を変えながらどんどんと発展していき、とても壮大な作品となっています。

▽ショパン / スケルツォ 第1番

1833年に作曲、1835年に出版したピアノ独奏曲。スケルツォとは「冗談」の意味を持ち、語源的にユーモアな音楽を指すが、本作品は青年ショパンの激しい感情が随所に迸っている。背景には祖国ポーランドでのロシアからの圧制に反する蜂起が失敗したことがある。中間部にはポーランドのクリスマス・キャロル「眠れ、幼子イエス」が引用されている。

Sumino Memo

本来スケルツォとはイタリア語で冗談、滑稽、ユーモアを意味する言葉であり、深刻な曲調であるこの曲はスケルツォとは離れているように聴こえるかもしれません。(シューマンが「これが冗談なら真面目は何になるのか」と評したように。。) 楽譜を見ると確かに速くて軽やかなモチーフも繰り返し現れるのでスケルツォっぽさを感じる事はできますが、技巧的な工夫や、あえて非和音を多用するような試みをしていることもわかります。実験的な事をしてつつも、それを深刻な雰囲気でもカモフラージュしている。そしてそれにスケルツォと名付ける。という事自体に非常にユーモアを感じませんか。スケルツォというのはメタ的な概念なのかもしれませんね。あくまで一意見です。あとはバラードとの対比という事もきっとあると思います。この曲はA-B-Aの3部構成になっていますが、それぞれの繰り返しがとても多く、演奏者がどのように変化をつけているかということに気にかけて聴いて頂けると面白いかもしれません。

▽リスト / ラ・カンパネラ

パガニーニのヴァイオリン協奏曲第2番第3楽章のロンド「ラ・カンパネラ」の主題を編曲して書かれた作品。リストが「ラ・カンパネラ」を扱った作品は4曲存在する。今回演奏するのは、1851年に作曲された最も有名な版である。リストは曲全体の構成を洗練し、ピアノの高音による鐘の音色を全面に押し出した。

Kamei Memo

「ピアノの魔術師」と呼ばれるリストが編曲に編曲を重ねて完成した作品です。「ラ・カンパネラ」は「鐘」という意味ですが、一口に鐘と言ってもいわゆる日本のお寺にあるような鐘のイメージではなく、終始高音域で鐘の音が表現されています。その中で、有名なパガニーニの主題が、少しずつ形を変え装飾をまといながら、様々な技巧を伴って発展していきます。僕がこの曲を最初に弾いたのは8年前で、当時の映像と最近の映像がYouTubeに載っていますが、その時その時の感情や気持ちによっても弾き方や音楽が変わってきます。今回はこのコロナによる影響で世界的にも不安定な中ですが、明けた先への希望だったり、久々の本番、素晴らしいホールで演奏できるという高揚感だったりといった感情を乗せて演奏できたらと思います。

▽サン・サーンス＝リスト / 死の舞踏

1876年にリストが、サン・サーンスの交響詩「死の舞踏 Op.40」をピアノソロ用編曲した作品。午前0時の時計の音とともに骸骨が現れて不気味に踊り始め、次第に激しさを増してゆくが、夜明けを告げる雄鶏の声が響きわたるや墓に逃げ帰り、辺りが再び静寂に包まれるまでを描写的に描いている。

Sumino Memo

リストが作曲あるいは編曲した作品の楽譜は数多く残されていますが、即興演奏を得意としていたリストが全てを楽譜通りに弾いていたとは思えないんですね。それは楽譜を見ると何となく感じます。この「死の舞踏」はリストがコンサートピアニストを引退した後の編曲作品ですが、それでも僕はもしリストがこれをコンサートで弾くならもっと即興的に弾いていただろうなと想像するのです。のちにホロヴィッツはこの編曲をさらに自身で編曲していますが「ここをこうしたらもっとカッコ良いだろうな」を尽く実現していて初めて聴いたときは本当に痺れました。こんな風に弾けたら良いなと思いつつも、僕はホロヴィッツにはなれないので、自分なりの解釈で演奏を試みます。

▽ラフマニノフ / 組曲第2番

1900年12月から1901年4月にかけて作曲された。交響曲第1番の失敗による神経衰弱のため、前作から5年ほどの空きがある。神経衰弱の克服後、友人ピアニストのゴリデンヴェイゼルに献呈するために作曲した。ピアノ協奏曲第2番と同時に並行して作曲された。曲は4つの楽章からなる。

Sumino Memo

この曲はかの有名なラフマニノフ ピアノ協奏曲第2番と同時期に作られたためか、似ている部分が多く見受けられます。組曲の方はハ長調で始まりハ短調で終わるのに対し、協奏曲の方はハ短調で始まりハ長調で終わるのも、とても対照的だなあと感じます。一つトリビアを紹介します。3楽章の「ロマンス」の終盤はラフマニノフの若き頃の習作「6手のピアノのためのロマンス」が引用されています。驚くべきことはピアノ協奏曲第2番の2楽章もこの「6手のピアノのためのロマンス」の冒頭が引用されているのです。若き頃の小さな曲のアイデアが、同時期に2つの名曲として昇華されている。とても夢のある話ですね。

Kamei Memo

幕開けに相応しい堂々とした1楽章。二台での重厚な響き、中間部での叙情的なメロディとリズム感の絡み合いが見どころです。2楽章は軽快に始まり、どれだけ2人の息を合わせられるかが鍵となります。軽く転がるような場面と優雅で美しい場面との対比が、互いを引き立てあいます。3楽章は、ラフマニノフらしいハーモニーとなんとも魅惑的でどこか寂しさを纏ったような旋律が本当に美しく、お気に入りの楽章です。特に頂点へ向けて広がっていく部分が大好きなので、それまで彷徨って揺れていたエネルギーが前へ前へと進んでいくのを感じていただけたらと思います。そして最後を飾る4楽章「タランテラ」。「タランテラ」はイタリアの踊りで、一説によると、毒蜘蛛「タランチュラ」に刺された時に毒が回らないようにするために踊り続けたことから、この名前がついたとか。一つの説にすぎないとしても大いに納得できてしまうような、劇的で激しい曲想の作品です。4つの楽章それぞれが見せる表情の対比なども感じながら、ラフマニノフの世界を存分に楽しんでいただけたらと思います。